

審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査会（令和 8 年 2 月 16 日 14 時から 16 時、於京都府立大学文学部会議室）において説明がなされ、質疑応答が行われた。ルーベック論文の研究史上の意義と、審査会で提出された論点は以下の通りである。

○研究史上の意義

本博士学位請求論文は、近世において相撲が広く社会に浸透していく具体像および相撲取の存在形態・社会的位置づけを明らかにし、かつ相撲を事例にして近世における藩・地域・国家の関係性について解明しようとするものである。特に先行研究では、三都・中央を分析対象にして国家による支配・統制の面が強調されて論じられてきたが、本研究では地域・地方に視点を置き、かつ神事相撲、相撲興行などの多様な側面における実態を分析することで、近世における相撲の社会的位置づけを明らかにすることを目的とするものである。

当該分野は史料が豊富に残されている訳ではないため、研究が進んでいるとは言えない状況にある。一方で社会的関心は高いため、概説書・一般書において取り上げられることが多く、その場合は十分な史料的根拠が示されないままに記述され、その内容が史実として広まり定着してしまうという問題を抱えている。本研究では、主として近畿圏周辺地域の藩政史料、村方史料、神社史料、近代史料などを博搜し、近世における相撲および相撲取の実態を実証的に解明した点に意義がある。

鳥取藩を事例に明らかにした「抱相撲」については、従来は藩主の趣向によるもの、また一時的な不安定な関係として考えられてきたが、法制度上にも位置付けられ藩内に恒常的・構造的に位置づけられる存在であったことを明らかにした。相撲人気やその軍事的な位置づけをめぐって、相撲取が藩政・藩制上において重要性を高めていくことになる可能性は高く、また近代国家において継承されていく側面があるという点も、今後深められるべき論点であるといえる。また相撲興行についても、史料上確認できる「困窮」という理由で従来は説明されてきたが、本研究で論じたように、民衆の強い欲求のほか、商人による投機や商業的な交渉などの人的交流を目的として開催される等、多様な側面から計画・実施されてきたことを明らかにした。これらの論点も、相撲が日本を代表する文化として社会において裾野を広げ定着していく過程・理由の一つであると考えられ、今後深められるべき点である。

しかし史料が少ない分野であるがゆえに、明確に実証できない部分も多く残している。また神事では能楽などと一緒に行われており、相撲だけを取り出して分析する手法も問題を残している。この問題は芸能・文化として分析し位置付けていく上でも、その他の分野も視野に入れた総合的な位置づけ・評価を行う必要性とも共通する。

上記のような課題は残るものの、ルーベック氏の学説は、日本近世における相撲・相撲取の歴史的な位置づけについて、藩・地域・国家という複眼的な視野から論じられ、また近代国家・社会成立と関連付けながら総合的に論じており、今後の日本近世芸能・文化史研究および近世近代移行期研究に新しい視点と基礎的事実を提示している点に、研究史上の

意義が認められる。

○審査会で取り上げられた主な論点

序章

- ・「社会」「人々」「地域」「身分」「職分」などのキーワードの定義が曖昧になっている。行論中でも使用方法・定義が変わっている場合があり、論旨の明確さに欠ける。
- ・キーワードの定義が曖昧なため、本研究の目的・問題設定が漠然となっている。先行研究の整理とともに目的・問題設定を明確にする必要性がある。
- ・行論の前提となる基礎的事実については、あらかじめ説明が必要である。

第一部

- ・すべて鳥取藩を分析対象としているため各章で重複した記述が多く、整理・組み換えで記述を再構成する必要がある。
- ・相撲取を抱えた藩の意図と藩主個人の意図との違いが十分に説明されていない。
- ・藩内の身分という観点から均質に扱うことはできないと結論付けるが、一定程度の抽象化に基づく歴史的位置づけ・評価は必要である。全体として身分論・社会集団論として、より踏み込んだ分析・評価が必要である。

第二部

- ・三都・中央を対象とする先行研究に対して、地域・地方に視点を置いたオリジナルさについて序章で記述し、その問題設定に適合する各章の配列・位置づけ・構成を再検討すべきである。
- ・分析した神事の中に相撲だけでなく能楽なども一緒に実施されている場合があるため、相撲だけを取り出すのではなく神事全体を分析すべきである。

第三部

- ・分析の中心になっている違式誑違条例について、必要な先行研究が明示されていない。また全国での公布、各府県での公布の文言の違いなども考慮されておらず問題である。
- ・近代史研究の先行研究への目配りが必要であり、史料についてももっと深い読み込みが必要である。また戦争への動員について改めて身分論・社会集団論としての分析が必要である。

全体

- ・近世史研究、近世近代移行期研究の中での位置づけが不明瞭である。部分的な指摘・分析に留めず、本研究の成果を明確に位置づける必要がある。
- ・身分論・社会集団論として本格的な分析・展開が必要である。

以上の質疑から明らかなように、本論文は、先行研究全体への目配り、史料の丁寧な分析、用語の明確な定義を踏まえた歴史的評価の必要性などに課題を残している。しかしながら、近世から近代における相撲の社会への浸透について、「抱相撲」という藩制度上の相撲取の位置づけ、あるいは多様な理由による相撲興行の隆盛などの論点を提示しながら、近世における政治・社会の実態との連関のなかで説明することに成功している。このような研究史上の意義に鑑み、本論文は博士の学位授与の評価基準を満たしていることから、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。